令和７年１１月１４日（金）　東奥日報【１５面】

オコッペいも 活用法は

大間

弘大生が規格外で試作品、紹介

質疑応答を交えて弘大生㊨と交流した大間中の生徒

弘前大学農学生命科学部の学生4人が11日、大間町の大間中学校（二階幸喜校長）を訪れ、1年生31人と交流した。4人は同町奥戸地区でオコッペいもとして栽培されている「三円薯」の収穫や販路拡大、規格外のイモの活用法考案などに携わっており、この日は学生が「オコッペいもっこ魅力発見・発信プロジェクト」に関わって見えた魅力や課題を発表した。このほか大学生活の様子や進路決定の経験を語った。（鳥谷部知子）

大間中を訪れたのは、同学部国際園芸農学科で石塚哉史教授（農業経済学）のゼミに所属する尾崎友亮さん、矢野拓馬さん＝以上3年、遠藤夢歩さん、長谷川里桜さん＝以上4年＝で10日から1泊2日の日程で同町に滞在した。

尾崎さんと矢野さんが、9月中旬に種イモ掘りをした体験を報告。奥戸地区の農業法人「あうぷ」と規格外のイモを活用した商品開発を話し合い、冷製スープを試作したことも紹介した。「私たちのゼミだけでなく多くの学生が大間町に興味関心を持ち、視察研修で訪問するようになり、関係人口の拡大につながった」と述べた。

大間中訪れ１年生と交流

後半は4班に分かれて、学生が大学受験の準備や大学生活の様子、就職先を決める際に重視した点などを語った。本県で理科の中学教員として採用されることが決まっている遠藤さんは「自分は高校時代、英語が苦手だと勝手に決めつけて、理系に進んだが、今思えば夢を狭めていたかもしれない」とし、興味の範囲を広く持って将来の選択肢も広げて―と語りかけた。

大間中の阿部奏太さんは「自分たちの町のイモを取り上げてくれてうれしい。食品ロスのないように規格外品の活用を考えて活動していて、すごいと思った」と語った。

この画像は，当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。